

# 地域連携・フロンティアセンター

2025（令和7）年度実績報告



# 目次

I. 目的と運営 .....	1
1. 目的.....	1
2. 組織運営 .....	1
II. 事業 .....	3
1. 地域連携委員会 .....	3
1) 公開講座 .....	3
2) 誰でも学べる地域セミナー .....	5
3) ホームカミング・デー .....	6
4) 日赤広尾地域防災プロジェクト.....	7
5) 武蔵野地域防災活動.....	8
6) 赤十字救急法講習 .....	9
7) 日赤出張暮らしの保健室 .....	10
2. 継続教育・実践研究委員会 .....	11
1) 実習指導者研修会.....	11
2) フロンティアセミナー .....	17
3) 赤十字リサーチ・フェスタ .....	18
3. さいたま地域連携委員会.....	19
1) 大学コンソーシアムさいたま .....	19
2) UR 都市機構との連携.....	20
3) 埼玉県内における2つの赤十字病院の看護師への研究指導.....	21
4. 渋谷区との包括連携 (S-SAP)	
1) S-SAP (シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー) 協定に基づく取組.....	22

# I. 目的と運営

## 1. 目的

日本赤十字看護大学地域連携・フロンティアセンターは、日本赤十字看護大学が、これまでの知的・実践的な活動をもとに、人々に求められる看護を追究し、開かれた大学をめざして2005（平成17）年8月に開設された看護実践・教育・研究フロンティアセンターを前身としている。

斬新な発想で創造的な活動を行う必要があるという認識のもとにスタートし、10年目を迎えた2015（平成27）年度には地域連携の推進をその活動の中心的役割を担うことを目的に加え、本学が掲げる地域連携ポリシーのもと、地域連携・フロンティアセンターとして再び新たに出発した。

2017（平成29）年度に地域連携委員会とフロンティアセンター運営委員会が統合され、地域連携・フロンティアセンター運営委員会という組織に、同時に本学の地域社会連携ポリシーは地域社会連携、産官学連携が強調された組織、機能に改正した。

2020（令和2）年度、さいたま看護学部開学と共に、さいたま地域連携・フロンティアセンター運営委員会が組織された。また、2023（令和5）年度から、地域連携・フロンティアセンター運営委員会をフロンティアセンター会議とし、各部門で行っていた活動を委員会活動として行うことに組織を改正した。

本センターは、建学の精神である人道に基づき、地域住民の健康と福祉に資することを目的に、以下の機能を果たすこととする。

- （1）多様化する地域社会の中で、求められるニーズに対応しつつ、新しい看護活動の実践を推進する。
- （2）看護実践の研究活動を通し、その知見を学内外に発信する。
- （3）看護大学としての教育機能を、国内外の社会に貢献する資源として活用する。
- （4）開かれたフロンティアセンターとして、臨床看護実践者をはじめ学外の研究者等と協働する場を提供する。

## 2. 組織運営（図1）

地域連携・フロンティアセンターは、地域連携委員会、継続教育・実践研究委員会、さいたま地域連携委員会の3つの委員会において、事業活動を推進している。

地域連携委員会は、「地域社会の文化向上に資する講座」、「卒業生・修了生関連」、「地域防災」、「地域連携」を柱に公開講座、ホームカミング・デー、日赤広尾地域防災プロジェクト、武蔵野地域防災活動、日赤出張暮らしの保健室の各活動を、また、継続教育・実践研究委員会は、実習指導者研修会、フロンティアセミナー、赤十字リサーチ・フェスタの活動をそれぞれ展開している。

さいたま地域連携委員会は、外部連携担当は公開講座やUR都市機構との協働事業、学生部会の発足により包括支援センター主催事業でのボランティア活動を行っている。内部連携担当は、FD・SD部会と協働して研修の開催、人材リソースの活用として先生マルシェと称してホームページにコンテンツ掲載をする準備を進めている。

地域連携・フロンティアセンター会議は、2025（令和7）年度は3回開催し、各事業の内容について共有、検証し、改善計画を提言した。

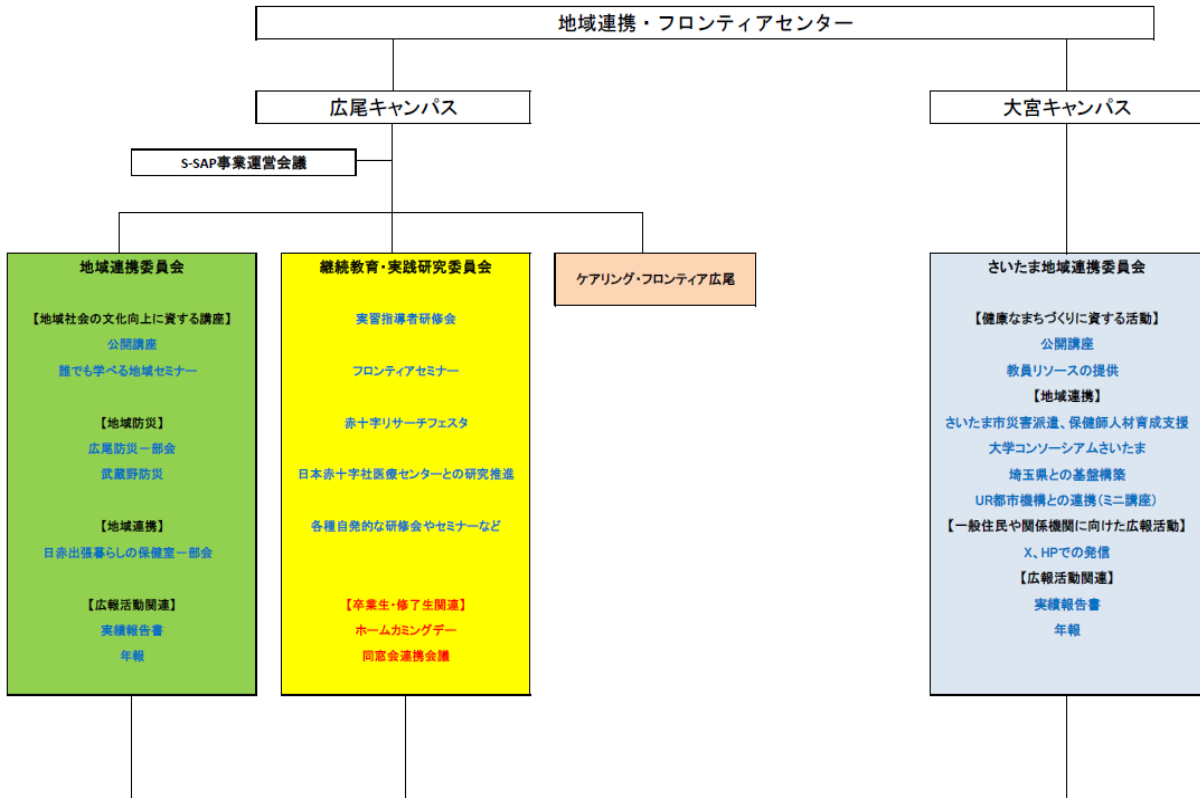
各事業実施にあたっては、学内の教職員、学部生の災害救護ボランティアサークル（SKV）や大学院学生をはじめ、これまでの事業に参加いただいている方や本学大学院修了生など幅広い力を得て運営している。

2013（平成25）年度に開始した広尾地区の保健医療福祉・教育が一体となってケアを創造するシステムとしての「ケアリング・フロンティア広尾」は、日本赤十字社医療センター、日本赤十字社総合福祉センター、日本赤十字社助産師学校、日本赤十字社医療センター附属乳児院、日本赤十字社幹部看護師研修センターと協働の、独立した組織として各プロジェクトの進捗を共有している。

【図1】

2025(令和7)年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター組織図

2025年4月1日



## Ⅱ. 事業

### 1. 地域連携委員会

#### 1) 公開講座

##### a. 趣旨

地域住民の方々の健康や豊かな生活の創造に向けて、ニーズに合わせた、講義や演習などのプログラムを提供する。

今年度は「健康で自分らしく生きる」～イキイキ体操～ が年間のテーマであった。

##### b. 活動内容

今年度は2回開催した。概要は以下のとおりである。

###### 1回目

日時：2025年9月5日（金）11時～12時

場所：多目的演習室

講師：日本赤十字看護大学さいたま看護学部 講師 白井美穂先生

テーマ：美姿勢と転倒予防のための「体幹&バランス」

###### 参加者概要

- ・人数：5名（男性1名、女性4名）（事前申し込み：10名）
- ・年齢層 60歳代～70歳代

###### 実施概要

昨年度に引き続き本学さいたま看護学部の白井先生に年間テーマ「健康で自分らしく生きる」とし、第1回は、美姿勢と転倒予防のための「体幹&バランス」について、講義と実際の体操を取り入れた演習も行った。質問の時間では、実際にやってみた感想など聞かれ、日常でからだを動かすことの重要性を実感されていたようであった。

台風が迫っての開催であったが、地域の方々に集まっていたいただき、講師との触れ合いもある和やかな会で大変満足度が高かった。



## 2回目

日時：2026年3月13日（金）11時～12時

場所：多目的演習室

講師：日本赤十字看護大学 白井美穂先生

### 参加者概要

- ・人数：8名（男性1名、女性7名）
- ・年齢：20歳代 60歳代～80歳代

### 実施概要

2回目も、本学の白井美穂先生にご担当いただいた。内容は、心と体をリフレッシュ！「ぐっすり眠れる」イキイキ体操とし、20分程度の講義のあと、40分程度からだを動かすエクササイズといった構成であった。

ぐっすり眠ることが、からだやところにも重要で、そのための体操を実際に行う事ができた。さいたま看護学部の体幹枕などもお借りして、安全にからだを動かす方法もご指導いただいた。参加者はご自身の体の状態を考慮しながら、積極的に参加していた。アンケート結果からも、プログラム内容がとても良い・良いが100%であった。講師がからだを動かす際に個別に声をかけ、気遣っていた様子が参加者にはとても安心できたようであった。

本学の公開講座に参加される方にとって、わかりやすい講義とエクササイズの組み合わせは、とてもニーズに合ったものだった。

今年度の結果からみると、来年度も今回のような講座を、2回シリーズで白井先生と本学の教員でご担当いただくと、ニーズに合ったものになるのではないかと考える。



### c. 来年度の課題と展望

次年度も引き続き「健康で美しく生きる」をテーマにし、本学の教員の稲田先生と白井先生にお願いし、地域の方々の健康への意欲向上を目指す。

## 2) 誰でも学べる地域セミナー

### a. 趣旨

公開講座とは別に、地域貢献の一環として、地域連携委員会が企画課とともに企画し主催するセミナーで、受講者のニーズに即した題材を選び、タイムリーに企画・開催する。

### b. 活動内容

2025（令和7）年度の「誰でも学べる地域セミナー」は、S-SAP（シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー）協定を活用し、渋谷区との共同開催によるセミナーを企画・実施した。渋谷区との事前の話し合いでメンタルヘルスに関する内容での実施を5月の共同企画会議にて決定し、一般にはあまり知られていないうつ病が引き起こす多様な症状やうつ発症のメカニズムと最新の治療法について、多数の著作があり講演経験も豊富な精神科医の仮屋暢聡先生に「沈痾 夜のあとに、朝がこない」をテーマとして11月15日（土）にご講演いただいた。

参加者は49名のうちほぼ9割が渋谷区からの参加で、本学でのセミナー初参加の人が大多数を占め、本学セミナーとしての参加者は1割程度であった。なお、本セミナーの参加費は500円だが、渋谷区セミナーとしての申し込みと参加（渋谷区在住・在勤）は無料とした。

参加者に協力いただいたアンケート（回答46名）からは、講演内容とともに仮屋先生の参加者との対話を大切にしながらの展開方法など、様々な点から高い評価と満足感が示された。

2025年度 日本赤十字看護大学 誰でも学べる地域セミナー  
渋谷区保健所 精神保健公開講座

# 「沈痾 夜のあとに、朝がこない」

近年、自然環境や社会情勢など私たちが住む世界は着しく変化し、その中で様々なこころの問題が顕在化してきています。この機会に、こころの健康について考えてみませんか？

テーマにある「沈痾」とは、「掛悪い」とか「重病」「難病」といった意味をもつ言葉です。ちなみに、万葉歌人であり山上憶良（660頃～733）が万葉集の歌の前に記した「沈痾自哀文」は「久しぶりの重病に自ずからを哀れんだ文」という意味で、彼は晩年、原因不明の病に悩まされていたといわれています。

**日時** 2025年11月15日（土）  
18:30～20:00（18時開場）

**会場** 日本赤十字看護大学  
（211講義室）

**受講料** 500円（当日、受付にてお支払いください。）  
※お約りがないようにご準備ください  
※渋谷区在住の方は無料

**定員** 50名程度

**お問い合わせ**  
日本赤十字看護大学 企画課  
TEL. 03-3409-0924  
FAX. 03-3409-0589

**会場へのアクセス**  
1.渋谷・東武東横線からバスをご利用の場合  
①渋谷駅東口から都営バス「T13」系統 日赤医療センター行き  
終点下車  
②東武東横線西口から都営バス「学1」系統 日赤医療センター行き  
終点下車  
2.東京メトロ日比谷線広尾駅をご利用の場合  
広尾駅から徒歩ルート（約15分）  
※共同住宅敷地内の私道は通行できません。くれぐれご注意ください。

申込方法は裏面へ▶



### c. 来年度の課題と展望

開催時間が遅かったため初めて来校する参加者が途中、道に迷う、隣接する病院を会場と間違えるなどの問題があった。S-SAP 共同開催で実施する場合、開催日時や開催場所（渋谷区施設活用も選択肢）、会場までの誘導掲示の設置などの配慮も今後は必要がある。

### 3) ホームカミング・デー

#### a. 趣旨

本学卒業生・修了生を対象として交流の場や学びの機会を提供することを目的として年1回開催する。

#### b. 活動内容

本年度は「学んだのは‘看護’だけじゃない」をテーマとして、教養科目も含めて科目を担当いただいた教員（教養科目については退職された元教員をご招待）、事務職員も含めて、学校生活を振り返り、近況を語りあう懇談会として9月27日に開催した。参加者は教職員含めて13名で、現在、大学に勤務していない卒業生は、2024年度学部卒業生の2名のみであった。少数の参加者ではあったが、大学での様々なエピソードが語られ、参加した卒業生からは「在学中は今日のように先生方と語りあう時間がなかったので、とても楽しかった」との声が聞かれた。

なお、参加者数の伸び悩みが続いていることについて運営担当の教職員で他大の開催状況と本学の開催経緯などを踏まえ検討し、①他大の状況を鑑みると、講演会よりも参加者の交流メインのものにニーズが高く、満足度をあげるためには多数の教職員の参加が望ましい、②開催は学祭日の開催が効果的で、同日開催であれば教職員の休日勤務増加を抑制でき、教職員の参加が無理なくできる、③他大にみられる在学生も参加可とすることで、在学中からホームカミング・デーの意識づけが期待できる、以上3点を提言にまとめ、大学に提出した。



2025年度 ホームカミング・デー  
学んだのは‘看護’だけじゃない!

日本赤十字看護大学は看護学部だけの単科大学です。でも、学んだのは当然ながら‘看護’だけではなく、教養科目、基礎ゼミや卒研、オリエンテーション合宿やクロアージュ祭などのイベント、課外活動、学食や売店、日常生活には様々な学びがあり、卒業後に最初に思い出すのは、そのような情景なのかもしれません。そこで、今年のホームカミング・デー、そのような思い出を持ち寄って、懐かしいゲストとともに楽しいひとときを過ごしてみませんか？卒業生、修了生の皆様のご参加を心よりお待ちしております！

開催日: 2025年9月27日(土)  
時間: 14時~16時  
場所: 広尾キャンパス: 多目的演習室  
当日は、一般教養科目を長年担当されていた先生方、武蔵野キャンパスや広尾キャンパスで事務を長く勤めていた職員の方をゲストとしてお招きしています。

当日は、気持ちよりの軽食を準備いたします。  
参加いただける方、事前にお申し込み下さい

武蔵野キャンパス  
クロアージュ祭  
オリエンテーション合宿  
樋口康子先生記念樹  
広尾キャンパス旧校舎

【申込方法】 記載のURLまたは右記二次元コードから専用フォームにアクセスしてお申し込みください。  
URL (<http://wa.formzu.net/diet/S21836055>) ※申込締切 2025年9月19日(金)  
【お問合せ先】 日本赤十字看護大学 企画課 企画振興係 (chiki@redcross.ac.jp)



#### c. 来年度の課題と展望

委員会編成の変更により、来年度よりホームカミング・デーの運営担当は地域連携委員会から継続教育・実践研究委員会となる。担当業務内容から、卒業生・修了生とコンタクトをとることが現行の委員会より適していると判断され、担当変更となったことから、今後の新たなホームカミング・デーの発展にむけた活動展開が期待できる。

#### 4). 日赤広尾地域防災プロジェクト

##### a. 趣旨

プロジェクトの目標は、広尾地区の日赤6施設（看護大・医療センター・総合福祉センター・乳児院・助産師学校・幹部看護師研修センター）の連携と各施設の防災機能強化と人材育成、災害時のスムーズな連携を目的とする。さらに行政・医師会・住民組織等と協働し、広尾地区における防災連携範囲を広げることである。

##### b. 活動内容

###### (1) プロジェクトメンバー

日本赤十字看護大学（〇織方・河田・田尾・長井・好永・山城・洪澤）；日本赤十字社（玉井・天舛）；日本赤十字社医療センター（諸江・鷺坂・浅野・松浦・園田・柳澤・長谷川・佐藤・三浦）；総合福祉センター（角・横山）；乳児院（芝・張）；日本赤十字社幹部看護師研修センター（加藤）；助産師学校（近藤）；渋谷区医師会（高橋）；渋谷区（大里）；オブザーバー日本赤十字社東京都支部（本多・生形）；の28名で活動を行った。

###### (2) 活動内容

###### ①子ども食堂出張防災講座（6回）リフレッシュ氷川、美竹の丘集会所で実施

2022年度に活動を開始し4年目となった。メンバーが本学大学院生、災害救護ボランティアサークルの学部生と共に、渋谷区内の子ども食堂で「三角巾法」「ぼうさいすごろく」「寒冷期の災害時の保温の工夫」等のテーマで6回（5/20, 9/8, 9/16, 10/13, 2/17, 3/9）実施し、親子50名程度（感染予防のため各回5名までに参加人数制限中）が参加した。子ども食堂運営の地域住民からは「楽しく参加できた」「身近なもので防災に備えられることが発見だった」等の感想が聞かれた。主催者の高齢化にも対応し6回の協力で、住民との防災教育を通じた交流を実施することができた。

###### ②渋谷区防災キャラバン出展（1回）神宮前小学校で実施

10/18に医療センター・日赤本社・日赤看護大学所属のメンバー21名が中心となり出展した。ブースでは、子どもの救護服試着体験、救急車の試乗対応小児BLS、AED体験を実施した。来場者は1,074名（うち神宮前小学校学童303名）で、本ブースには200組程度の来場があった。「AEDの使い方や胸骨圧迫の方法が理解できた。有事の際は自分が率先して人命救助できるよう、今後も定期的に講習など受けていく必要があると感じた。（50代女性）」「AEDが小学校の玄関にあるのは知っていたが、実際に触ったのは初めてであった。（小学生）」「防災キャラバンなどの行事は参加するようにしている。勉強になった。（60代男性）」「救護服試着体験や救急車に乗る体験をでき、子どもが喜んでいった。（30代女性）」等の感想が聞かれた。

###### ③BCP勉強会（4回）

受援支援体制マッピングについて情報を更新し、広尾地域の災害時連携体制を見直した。

##### c. 来年度の課題と展望

- ・今後も広尾地区における防災活動、広尾地域6施設の連携を継続する。
- ・子ども食堂へのお出張防災講座では住民との連携を継続する。新規参加者もしくは出張防災講座先を獲得する。
- ・防災訓練参加も継続、スタッフの人数を増やし、相談活動などにも対応できるようにする。
- ・これら防災イベントは休日や夜間の実施が多いため、メンバーのワークライフバランスに配慮し代休が取得できるようにする。

## 5) 武蔵野地域防災活動

### a. 趣旨

#### 【武蔵野地域防災セミナー】

武蔵野市防災課、武蔵野市民防災協会、武蔵野市民防災活動グループ（COSMOS）、および本学（災害看護 CNS 課程学生等、学部学生による災害救護ボランティアサークル（SKV）、教職員が共同してセミナーを企画運営し、武蔵野市民を主な対象として、市民防災力の向上を目指している。

#### 【武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練）】

武蔵野市の医師会、歯科医師会、薬剤師会、助産師会等と3つの病院、防災課および本学が参加し、緊急医療救護所、緊急医療救護所活動、医療連携訓練、感染対策などの検討を目的に活動している。

### b. 活動内容

#### 【武蔵野地域防災セミナー】

セミナーに関して、4月から月1回の会議（18-19時）を12回行い討議した。避難所・避難生活をメインテーマに、武蔵野市民報（9月号）で広報をして参加者募集した。セミナーは5回実施し、延べ175名参加した。アンケートにより実施を評価し、参加者からは、毎回おおむね満足との回答を得た。

- ・第1回：10/4/10-12時「災害時のトイレのリアルと備え～健康に過ごすために今できることを考える～」をテーマに武蔵野市防災課、武蔵野市民防災協会、本学災害看護大学院生4名が企画し、SKV1名、教職員5名が運営に加わった。参加者33名であった。
- ・第2回：11/15/13-15時半、本学主催「もしも富士山が噴火したら？～火山灰の影響と長期化する混乱への備え～」をテーマに、本学災害看護大学院生3名が企画し、SKV9名、教職員5名が運営に加わった。参加者39名であった。
- ・第3回：12/13/13時半-16時「能登半島地震とその後に発生した水害の実態と対応～避難所に居住する住民の受援と外部支援の経験値から～」をテーマに、COSMOSが企画し、招聘講演者3名を招いて講話を行った。本学からはSKV9名、大学院生4名、教職員3名が運営に加わった。参加者31名であった。
- ・第4回：1/31/13-15時半「避難生活で後回しにされる災害ごみの課題～被災地の実態から学ぶゴミの出し方等の対応～」をテーマにCOSMOSが企画し、招聘講演者1名を招いて講話を行った。本学からはSKV2名、教職員3名が運営に加わった。参加者45名であった。
- ・第5回：2/21/13-15時半「身につけよう！長期の避難生活における健康を保つエクササイズとリラクゼーション」をテーマに、SKV7名が企画し、他SKVメンバー14名、大学院生4名、教職員3名が運営に加わった。参加者27名であった。

#### 【武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練）】

12月7日（日）8～12時、医療救護所を武蔵野赤十字病院に設置し、医療救護本部との通信訓練及び寸劇方式によるトリアージおよび、傷病者受け入れ訓練を実施した。本学からはSKV4名、教員1名が参加し、傷病者役および他団体から参加する傷病者役への役付けを行った。

### c. 来年度の課題と展望

#### 【武蔵野地域防災セミナー】

今年度で「地域防災セミナー」は終了とし、より地域のニーズに沿った活動が行えるように体制の見直しを図る。アンケートでは、演習や参加型のセミナー要望が多く、より住民参加型にすること、そして、対象を絞った出前講義も考えること等を次年度は検討する。

#### 【武蔵野市総合防災訓練（医療連携訓練）】

次年度もSKVと共に参加し、医療救護について検討する機会とする。

## 6) 赤十字救急法講習

### a. 趣旨

本学学生の講習参加機会の増加と日本赤十字社医療センターの講習開催枠の活用を目的に、赤十字救急法講習を共催して行う。

### b. 活動内容

学生定員 100 名に対し、受講者は 90 名であり、最終資格認定者は 87 名となった。昨年度までは年 30～40 名であったため、学生の参加数は大幅に増加した。医療センタースタッフと本学学生が合同で受講したことで、医療センターのスタッフが学生に教えたり、声掛けする様子が見られ将来のキャリアプランにも活かせる交流となった。

・第 1 回：7/26・7/27・8/2（医療センター会場）

医療センター 18 名、本学学生 11 名が受講した。また本学教員 1 名が指導員として参加した。

・第 2 回：10/25・10/26・11/1（医療センター会場）

医療センター 11 名、本学学生 16 名が受講した。また本学教員 1 名が指導員として参加した。

・第 3 回：2/16～2/18（大学会場）

本学学生 51 名が受講した。また本学教職員 5 名が指導員として参加した。

・第 4 回：2/28・3/7・3/8（医療センター会場）

医療センター 15 名、本学学生 12 名が受講した。また本学教員 1 名が指導員として参加した。

#### 【医療センター開催】



#### 【大学開催】



### c. 来年度の課題と展望

申し込み後の取消が発生した場合や医療センターの応募数が少ない際は、大学定員を増やし追加募集を行い、申込期間を延長し対応した。大学開催では、医療センター職員の参加希望者はおらず、本学学生のみが参加した。大学枠の 100 に対し、90 名の申し込みであったため、定員を充足するために周知方法を検討する必要がある。さいたま看護学部の学生からも参加希望があり、次年度以降に検討する。

第 3 回の大学開催では、指導員は本学教職員 5 名、学園本部職員 1 名、医療センター関係者 5 名が 1 日 5～7 名ずつ参加した。平日の場合は業務調整、休日の場合は振替休暇の確保が課題である。

## 7) 日赤出張暮らしの保健室

### a. 趣旨

大学として地域住民の方々のウェルネスに関する支援を行う。

- ・地域住民の気軽な健康相談及び健康増進活動への動機付けの機会
- ・健康教育や交流を通して、住民だけでなく介護者及び支援者支援の場

### b. 活動内容

プロジェクトメンバー：日本赤十字看護大学（石田・稲田・佐藤）

地域住民の方々、行政の方々とともに2回/年程度で始めた「日赤出張暮らしの保健室」であったが、年3～4回の開催を継続できている。場所は大学から徒歩圏内の都営住宅の集会室であった。

第1回 2025年6月19日（木）本学講師・稲田

テーマ：「あなたにある癒しのちから」参加者：18名

第2回 2025年12月18日（木）本学職員・好永

テーマ：「コースターづくり」（かぎ針編み）参加者：12名

第3回 2026年2月24日（火）本学職員・好永

テーマ：「ブローチづくり」（かぎ針編み）参加者：14名



今年度から学び合いセミナーに加えて、新たに「編物」を導入し、全3回を開催した。編物という作業を通じて、参加者一人ひとりの「その人らしさ」が豊かに表現され、自然と教え合いや褒め合いが生まれる温かい交流の場となった。参加者が生き生きと主体的に取り組む姿が引き出されたことは大きな成果である。この和やかな雰囲気の中で行われた健康相談は非常に受け入れやすく、「次回まで健康づくりを頑張ろう」という前向きな動機づけにつながった。

### c. 来年度の課題と展望

- ・次年度の展望は、「長く継続できる形」へと進化させることである。
- ・現在は特定のスタッフや自治会長の多大な協力に支えられているため、今後は参加者自身が無理なく運営に加われるような仕組みづくりを進めていく。
- ・他の地域活動の日程を把握したうえで、できる限り重複回避と参加機会の確保をする。
- ・本活動は、学生にとっても学びの場となることが分かってきたので、学生も巻き込んでいく方向で検討する。
- ・本学の地域への貢献を外部にもアピールすることを意識して広報する。

## 2. 継続教育・実践研究委員会

### 1) 実習指導者研修会

#### a. 趣旨

実習指導者研修会は、本学（広尾キャンパス）と日本赤十字社医療センター、武蔵野赤十字病院、大森赤十字病院、東京かつしか母子医療センター、横浜市立みなと赤十字病院が共同で企画・運営している。赤十字施設には、看護師養成の長い歴史があり、教育と臨床が共に協力し連携して、後輩を育てる姿勢がある。看護学教育における実習の意義および実習指導者としての役割を理解し、効果的な実習指導に繋がられるように、実習指導者を育成すること等を目的にした研修会である。赤十字施設以外の看護学実習を受け入れている医療機関等の方も参加可能であり、各講義単位での受講も可能な公開講義を設けている。

#### b. 活動内容

2025年度は本センターの継続教育・実践研究委員会に位置付く実習指導者研修会部会を構成する教職員9名（学内企画委員）が中心となり、学外企画委員の日本赤十字社医療センター、大森赤十字病院、葛飾赤十字産院、横浜市立みなと赤十字病院に所属する看護職者（各施設1名、計4名）と協働した。

2025年度は学内会議を4回、学内外の委員による企画会議を3回開催の上、研修会の準備を行い、対面開催2回、WEB開催2回で研修会を行った。

開催期間は6月～1月とし、開催回数は4回、研修会の構成は実習指導に関する理論・演習・リフレクションとした（詳細は別紙参照）。学内演習の見学などのオプションは、後期の学内演習を公開した。また、大森赤十字病院では、研修生5名が、医療センターでは2名が、実際の実習指導場面の見学し学びを深めた。研修生のモチベーション維持と研修成果の確認を目的とし、リフレクションシートの提出は引き続き行い、各赤十字施設の担当者にも内容を共有した。

全ての公開講義は本学の新任教員のFDとして位置づけ、岐阜大学准教授の川上ちひろ先生の「発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導」については、障がい学生支援委員会の共催FDとして開催した。

研修会の修了要件は全体の3/4の出席が条件であり、最終的な修了生は60名（赤十字施設51名、その他施設9名）であった。今年度は、秦野赤十字病院からの研修生が6名参加した。公開講義（FD除く）の参加者数は学外4名、学内（大学院生11名、教職員14名）であり、例年と比べ減少した。研修生へのアンケート結果からも、プログラム内容（とてもよかった22名(46%)、よかった25名(52%)）、プログラム回数（ちょうどよい(94%)）、開催方法（対面とWEB）についても、とてもよかった・よかったとした人が83%であり、「実習指導者臨床でいかせる学びとなった」「講義とグループワークの構成がよく、理解が深まった」などの回答があり、適切な回数・方法、かつ有意義な内容の研修会であったことが伺えた。

#### c. 来年度の課題と展望

WEB開催における研修生からの通信環境やトラブルは殆どなかった。対面でグループメンバーの顔合わせを実施したのち、11月にWEBでグループワークを行ったものの、グループによってはディスカッションが活発にできなかったところもあった。実習指導の経験があまりない研修生が多い場合は、ファシリテーションの工夫が必要であることが今後の課題である。次年度は、講義の一部はe-learningにすることも検討していたが、例年通り、WEBと対面それぞれのメリットを組み合わせたい開催とすることとした。研修会の継続性についても議論しながら、将来的な方向性も検討していくことが課題である。さらに、より研修生が実習指導のスキルを身につけられるように、各赤十字施設での実習指導場面の見学を実施して頂くことで、研修会の学びが深まるように検討する。

今年度は、研修生からの意見を反映し、「教育原理」の講義を第1回の研修会にプログラムし実施した。今後も、講師の先生方の都合もあるが、学びの順序性とアンケートからの意見も参考にし、より有意義な研修会になるように努める。

開催月日	時間	プログラムの内容	講師
2025年 6月11日 (水) Web開催 受付開始: 8:30	9:00-9:30	開講式／オリエンテーション	
	9:30-10:30	教育課程と実習の位置づけ	企画委員 実習担当教員
	10:40-12:10	教育原理 ー教育原理と実習指導ー 教育の意義、目的、教育活動の特性、人を育てる(教育)観	渋谷真樹先生 本学 教授
	13:00-14:30	教育心理 ー学習者の心理ー 人間の発達、学習過程における心理、学生の特性	遠藤公久先生 本学 名誉教授
	14:40-16:10	実習指導概論 実習指導の展開と実習指導者の役割、実習指導の過程・方法	佐々木幾美先生 本学 教授
	16:20-16:50	オリエンテーション	
2025年 8月8日 (金) 対面開催 受付開始: 8:30 ガイダンス 8:50	9:00-10:30	実習指導の計画①	企画委員 実習担当教員
	10:40-12:10	対人関係論	堀井湖浪先生 本学 准教授
	13:00-14:30	教育方法 ー状況に埋め込まれた学習ー 状況的学習論、正統的周辺参加論	有元典文先生 横浜国立大学 教授
	14:40-16:10	実習指導の計画② Group Work にて、教育カリキュラムと実習の位置づけを検討し、 実習指導案を作成する	企画委員 実習担当教員
	16:20-16:40	オリエンテーション	
8月～12月	実習指導に関する実習（実習指導案を用いた展開・自施設での実習指導場面の見学等）		
2025年 11月25日 (火) Web開催 受付開始: 8:30 ガイダンス 8:50	9:00-10:30	リフレクションの概念（録画配信）	西田朋子先生 本学 准教授
	10:40-12:10	実習指導のリフレクション Group Work にて、実習指導についての振り返りを共有する	企画委員 実習担当教員
	13:00-14:30	発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導	川上ちひろ先生 岐阜大学 准教授
	14:40-16:10	医療・看護の動向と実習	安部陽子先生 本学 教授
	16:20-16:40	オリエンテーション	
2026年 1月26日 (月) 対面開催 受付開始: 8:30 ガイダンス 8:50	9:00-10:30	看護理論 看護の概念、看護の知と実習指導	川原由佳里先生 本学 教授
	10:40-12:10	看護倫理 ー実習指導を通して伝える看護ー（録画配信） 看護と倫理、実習指導と倫理	吉田みつ子先生 本学 教授
	13:00-15:00	実習指導の体験を語り合う：全体のまとめから課題への具体的チャレンジ Group Work にて、立案した実習指導案を用いて振り返りを行い、実際の実習指導で得た 学びを深める実習指導体験の共有、学びや課題の深化、具体的チャレンジに関するディス カッション	
	15:10-15:40	修了式・閉講式	

全4回の研修会の概要とアンケート結果

■第1回：2025年6月11日（水）

開校式、オリエンテーションに続き、①教育課程と実習の位置づけ、②教育原理、③教育心理、④実習指導概論についての講義が行われた。

①**教育過程と実習の位置づけ**：本学が教育理念と教育目標をもとに、講義・演習・実習の有機的な結びつきに取り組んでいること、各学年で体験する実習での反応そして実習指導者と大学教員の連携の重要性について説明した。とてもよかった30名(54%)よかった26名(46%)であり、大学の方針やカリキュラムが理解できた、指導者と教員の役割が理解できたなどの感想があった。

②**教育原理**：「教育原理」の講義は、研修会のはじめにしてほしいという要望があったため、今年度は初回の講義として設定した。教育とは人間の成長への意図的な働きかけであり、個人に価値を置き自律を促すものである。歴史を振り返ると、前近代においては教える努力は見られず、日常生活の流れの中で達人の姿を真似て思考錯誤し、家族の系譜に沿って知識技術が伝承されていた。近代において子どもという概念が誕生し、何のために教えるかという目的、何を目指してどのように教えるのかという具体的目標、発達段階に合わせて「こうなってほしい」という意図的な働きかけが構築された。実習指導の現場で活かすには、テーマを厳選し核になる学びに繋げリフレクションする。また、実際の場面で学習者を尊重し「なぜ？」を問い考え方を確認する。動機付けし課題を自分で気づけるよう関わり、生涯探求し省察していけるよう、関わるのが大事であることを学んだ。参加者から学生の疑問を引き出せないため、何か方法はないかという質問があった。講師からは、待つことも大事、教育は長い目で見ると回答があった。アンケート結果は、とてもよかった31名(55%)、よかった23名(41%)であり、教育についての歴史や原理を踏まえ理解することができた、実習指導への活用が理解できたなどの感想があった。

③**教育心理**：教育心理では「生涯発達の視点からみた青年期」と「学習過程における心理」の講義であった。青年期の位置づけ、日本人の自尊感情が低いことの文化的要因、自己意識とアイデンティティ、交友関係、孤独感など青年期の特徴について深く学ぶことができた。また、障害学生は、年々増加し、代表的な発達障害の特性と発達障害への対応例についても講義していただいた。学習者がどのようなタイプなのかをみながら、課題の困難度を相手の達成動機に合わせる事が求められる。学習における動機づけ一外発的動機づけから内発的動機づけへ高めるためにどこで躓いたのか、自己効力感を高めるために成功体験もしくは「わかること」の体験が重要であると学んだ。とてもよかった31名(55%)、よかった23名(41%)であり、青年期の特徴や問題を学び、どのような関わりが必要か考えることができたという感想があった一方で、授業内容が多く、スピードも速いという感想もあった。

④**実習指導概論**：看護学教育の授業は、系統的な知識・理論の学習である講義、具体的な技術項目の学習や看護過程と事例による学習をする演習、講義と演習を統合し実際の場面で学ぶ実習、この3つの結びつきを4年間らせん状の学習で積み重ねていく。看護学実習は、本物の場面本物の患者に学び看護に対する関心と意欲を高め、関わりを通して対象を理解し、人間の尊厳を重視する姿勢を獲得し、自らの人間的な成長を促進する学習の場である。実習での経験から看護の本質に迫り自己の看護観を培う意義を持ち必要不可欠な授業である。経験は同じ場面でも学生によって感じ方が違うため、実習指導者は経験に意味づけする役割がある。実習において教師と指導者は協働して役割を果たすことが重要である。受け入れる側は、脅かされない環境を作り実践の機会を重視する。不安や願いが入り乱れている学生の話聞きながら真の困りごとを理解し興味関心からアプローチする。発問と説明を工夫し学生の意思決定に参加できる関わりをする。実習指導は、指導者にとっても学びとなる。アンケート結果は、とてもよかった45名(79%)、よかった12名(21%)であり、事例が多く、実習指導のイメージが膨らみ、今後の指導に役立つと感じた意見が多く出ていた。

## ■第2回：2025年8月8日（金）

8月8日の2回目の研修会は、①実習指導の計画、②対人関係論、③教育方法、④実習指導の計画と実習指導の内容で、対面で行われた。

**①実習指導の計画：**実習指導者の役割、実習要項の役割、実践場面の教材化について知識を得て、実習指導案の実際として計画立案を行えるよう学んだ。実習指導者の役割では先輩のケアをみる、モデルにするモデリングと学生が整理できるように支援するファシリテーターについてそのプロセスやスキルの講義を受けた。今の学生の傾向を踏まえながら最後の合意形成までファシリテータースキルを活用し支援する方法に興味深く受講していた。実習要項の役割では、その目的や目標を理解することでどんな看護師、助産師になってほしいかがみえてくると確認した。実践場面の教材化では、患者との関わりややりとりを教材として切り取り、学生の考えを共有、その行為の意図を言語化していくといった学生との対話により教材化し展開する方法について学んだ。アンケート結果は、とてもよかった20名(44%)、よかった21名(47%)であった。

**②対人関係論：**対人関係論は、実習指導の基本原則とプロセスレコードがなぜ必要かという講義内容であった。臨地実習は学生が対人関係を学ぶ場であり、コミュニケーションでのつまずき、失敗から学生は学ぶ。そのため、実習指導者は自らのケアの根拠など言語化し、学生に伝えることの重要性を学んだ。学生の言動にも彼らなりの意味があることを理解し、実習指導における共育の姿勢やアサーティブコミュニケーションの必要性が理解できた。また、看護の現場は自己一致を妨げられがちだが、自己が感じていることに注目することで、自己理解、他者理解を可能にし、適切なケアにつながる。プロセスレコードを活用することで、未解決な課題が掘り起こされ、時間的経過に沿って再現することで文脈を読みとる力や対象者のニーズを見極める応答能力を高めることができる。一方で、実習指導者もプロセスレコードを読み解くことが必要である。プロセスレコードを読むことで学生の困りごとが見え、実習指導者として適切な助言・指導につながることを学んだ。アンケート結果は、とてもよかった22名(49%)、よかった20名(44%)であり、経験談もあり、わかりやすかったなどの感想があった。

**③教育方法：**学習者の立場での体験をすることで、実習指導者は何を与えているのかを学習するねらいがあった。ゲームを取り入れながら、思い通りにならないことや普通であることの大変さを学習した。研修生からは「発言すると変に思われないかと心配している自分に気づいた」「一体感を持てた」「学生が質問できない気持ちがわかった」という反応があった。安全・安心な場づくりが重要であり、場があれば対人関係はできるものという先生からの教えがあった。研修生が徐々に発言が増え、積極的に参加している様子から自分が普通でいられることや場をつくることの重要性を体感する機会となった。アンケート結果でもとてもよかった29名(64%)、よかった15名(33%)であり、はじめは緊張したが実習にくる学生の気持ちを感じることができたなどの感想があった。

**④実習指導の計画：**成人、老年、母性、小児、精神各グループに分かれて指導案の作成を行った。開始時間と共にメンバー同士の話し合いが始まり、事例から週案か日案にするか、どの課題を行うか活発な発言が聞かれた。他のグループも、活発な意見交換する声が聞かれた。指導案を作成するにあたっては、どうしても自身が看護師であるため看護師目線で病態や治療、ケアに目が向いてしまう傾向があったが、助言を行うことで実習の指導者であり学生の学びや、気づきを得るためにどうすればよいか考えることが出来ていた。実習目的・目標と指導計画とを行き来しながら研修で学んだことを活かしながらグループワークする姿がみられた。アンケート結果はとてもよかった20名(44%)、よかった19名(42%)であり、グループで話し合うことで自分にはない視点を得られた、ファシリテーターの丁寧な進行と導きで発言しやすかったなどの感想から、交流を交えて、今後の実習指導案の作成に向けて、準備できた様子であった。

### ■第3回：2025年11月25日（火）

11月25日は①リフレクションの概念、②実習指導のリフレクション、③発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習、④医療・看護の動向と実習の構成でWEB開催にて行った。

**①リフレクションの概念**：看護に活用する知識、理論や実践・過去の経験から得られる知の種類を確認し、その中でも既存の知を増やし、将来の実践に影響を及ぼしていくためには、経験した後でのリフレクション（反省的知）が必要であることの講義をうけた。その行為は思考と行動をつなぐプロセスであり、感情への気づきからスタートし、内的な吟味・探求を行うことで、もの見方や考え方に変化をもたらす。学生指導においては学生が抱いた感情や疑問を大切に取り上げ、対話を通して「体験」「思考」「感情」「行動」「知識」といったことを再吟味し、思考を思考することで統合され、次の実践へと生かされる。しかし実習の場面においては、学生は指導者からのフィードバックを受ける時に怖い・恐怖感を抱く可能性がある。指導者は傾聴・承認を態度で伝え、オープンでパワフルな質問をすることで学生自体のリフレクションが促進されるよう、対等な関係でお互いを支援できるような環境を整えることが重要である。それらの過程を通し指導者自身も教えることを学び、成長につながる。アンケート結果は、とてもよかった36名(73%)、よかった13名(27%)であった。

**②実習指導のリフレクション**：冒頭にグループワークの目的について説明し、グループ毎にブレイクアウトルームに分かれて話し合いを行った。事前に自施設で実施した実習指導展中に経験した印象に残った指導場面について記述し、その場面と講義で学んだ内容と結びつけ、意味づけした内容を発表した。実習生と関われなかった研修生は後輩指導での場面について体験を意味づけした。研修生は、これまでの講義の内容をしっかりと振り返り、実習指導場면을客観的に深く意味づけをすることができていた。その後「自らの実習指導を振り返っての気づきと課題」というテーマで、実習指導の振り返りや悩みの共有を行っていた。実習生の反応に左右されるのではなく、相手の状況や背景を考慮したり、実習生がどのような考えに至った言動なのか確認するため、実習生との対話が必要であることを実感していた。また、実習指導者は話しかけやすい雰囲気であることなど心理的安全性のある環境づくりについても考えられていた。アンケート結果は、とてもよかった25名(50%)、よかった21名(42%)であった。

**③発達障害及びその特性をもつ看護学生の理解と実習指導**：はじめに発達障害及びその特性について説明があり、発達障害には、様々な神経発達症群があるが、障害特性に適した方法や教育的支援・配慮が必要であることがわかった。教育的支援の流れを理解し、対応が難しい学習者の問題、課題、対応方法を明確にし、丁寧な支援計画に沿った介入が重要であることを学んだ。発達障害がある学生は、統合して解釈することが苦手なことが多く、医療者との困り感のズレも生じやすい。そのため、教育者側は、障害特性の理解や学び環境の整備を行い、学習者も、医療者として質が保証される能力が習得することが必要である。発達障害がある看護学生の支援のために、法律を遵守しながら、その人に合ったキャリア支援を行い、様々な部門とシームレスな支援・連携ができるよう早期介入の重要性を知ることができた。アンケート結果は、とてもよかった24名(48%)、よかった24名(48%)であった。

**④医療・看護の動向と実習**：社会保障改革の方向性について、社会保障制度について基本から全世代型社会保障制度構築会議の内容をわかりやすくご説明いただいた。2025年問題から2040年問題へシビアな状況があり、少子高齢化に対応すべく「地域の支えあい」「全世代での医療費を公平に支える仕組み」「DXに積極的に取り組む」など方向性を理解できた。また、新たな地域医療構想として、病床機能の変化や在宅医療の需要増加、対応など理解を深めることができた。日本の現状を踏まえ看護基礎教育のカリキュラムが変更されていること、学生を取り巻く経済状況を知り、今後実習指導者として学生個々の状況をアセスメント能力を高める必要があることを学んだ。アンケート結果は、とてもよかった19名(39%)、よかった24名(49%)であった。

#### ■第4回：2026年1月26日（月）

1月26日は、①看護理論、②看護倫理、③実習指導の体験を語り合う講義、演習を対面で企画し、研修会の最終回として閉講式・修了式を行った。

①**看護理論**：様々な特性のある学生が入学する昨今、普段看護師が現場で考えていること「看護とは～」を看護理論と照らし合わせて学生に伝えてほしいというメッセージから講義が始まった。学生の多くは自分ができることを看護に位置付けていない。そのため判断し行っていることが看護であると実習現場で理論を通し意味づけをする。看護理論の役割とは、地図：看護の現象（何を見るか）を照らしだす、視座：看護の現象の様々な解釈を示す（説明を与えてくれる）、価値：看護師が責任を負うこと、看護として正しく善いことを示すことである。多くの看護理論家の看護理論のポイントを分かりやすくご講義いただき、研修生は頷きながら真剣に聴いている様子であった。日々何気なく行っている看護を看護理論と結び付けることは、スペシャルなものに感じられる。ベットサイドでの看護ケアが特別なものであることを、臨床で指導者が語ることは学生にとって魅力的であることが研修生に伝わったと感じた。アンケート結果は、とてもよかった29名(60%)、よかった19名(40%)であり、学生の時に学んだ内容で、臨床とのつながりを振り返ることができた、いい学びになった、看護とは何か改めて考えるきっかけとなったなどの感想があった。

②**看護倫理**：看護学生が実習を通して体験した看護実践を振り返り、実習で感じた倫理的問題についての発表やレポートが共有された。事例より看護学生が多角的に考え、倫理的問題について深く考えていることがわかった。さらに、看護師の道徳的苦悩、倫理的な力の高め方、倫理的課題のアプローチ方法、ツールなどについて講義が行われた。その後のグループワーク研修においても、参加者が「過去の成功体験」「慣例的看護」「業務優先」で行動していたことを内省する発言が聞かれていた。今後の実習指導においても倫理的アプローチが重要であり、実習指導では、安全が保たれた自由に話し合える場が必要であることも共有された。グループワーク研修の発表では、対象理解のために自己紹介や楽しく話すためのアイスブレイクなども提案もだされた。学生や患者・家族や医療者と考え方が違うことを共有し、学生と対話することは学生を理解することになり、看護の本質に触れることにつながる。それは、看護の価値や意味について考える時間となるということを学んだ。アンケート結果は、とてもよかった26名(53%)、よかった22名(45%)であり、学生の気持ちを知れてよかった、学生の立場を考える機会となったなどの感想があった。

③**実習指導の体験を語り合う**：初めにグループワークの目的が説明され、1G2～5名のグループに分かれ話し合いがなされた。最後に各分野のグループから発表し全体共有された。グループワークでは実習指導場面で直面した出来事や思いを活発に発言し自由に意見交換がなされていた。「学生にとって何がうまくいっているか、うまくいってないか分からず指導している」「学生を学習者としてとらえられていない」「できていないことばかりに目がいく」「学生の言葉の意図を聞いて関われば良かった」など内省されていた。また、上手くいった指導場面と適切でなかった指導場面を互いにすり合わせ共有し、指導方法を間違えると学生は質問できなくなり有効な実習に繋がらないことへの気づきになっていた。そして、「一方的に教えるのではなく優しく意味に結び付けて教える」「学生が自分の考えや質問を発掘する作業を一緒にしたい」「学生側から見た指導はどうなのか考えてみる」など、次に繋がる課題を見出すことができおり、意味深い語りにつながっていた。アンケート結果は、とてもよかった27名(55%)、よかった19名(39%)他の指導者との意見交換で、様々な考えが知れてよかった、自分の思いや考えを表出することで一緒の悩みを持っている人がいて安心したなどの感想があった。

## 2) フロンティアセミナー

### a. 趣旨

本部会は、本学の教育的機能を活用した人材育成、病院との協働、臨床実践能力の向上を目指し、タイムリーな配信を行う場と位置付けられている「フロンティアセミナー」の企画、運営を行う。

### b. 活動内容

#### 1. 事業概要

本セミナーは、「ベテラン・ナースに聞いてみよう～看護を続ける中で培ったマインド～」をテーマに、2026年2月21日（土）13時30分から15時30分まで、Zoom ウェビナーによるオンライン形式で開催した。本事業は、専門資格や管理職の職位をもたず、長年看護実践を続けてきたベテラン・ナースの経験とマインドに焦点を当て、看護を継続する中で培われた学びを共有することを目的として実施した。参加費は、参加しやすさを考慮し3,000円から1,000円に変更した。当日の参加者は26名であった。

#### 2. プログラム

##### I. 開会の辞

##### II. 看護を続ける中で培ったマインド

###### ・病院で働くベテラン・ナース

花房 宇多子 氏（東京女子医科大学病院）

インタビュアー・解釈：西田 朋子、荒井 千瑛

###### ・地域で働くベテラン・ナース

望月 葉子 氏（榎ヶアーズ 白十字訪問看護ステーション）

インタビュアー・解釈：細野 知子、黒田 由香里

##### III. ベテラン・ナースの学び～研究・教育の立場から

###### ・講師：佐々木 幾美（日本赤十字看護大学 副学長・看護教育学 教授）

##### IV. 総合討議

##### V. 閉会の辞

#### 3. 内容の概要

セミナー開催に先立ち、病院および地域で働く2名のベテラン・ナースにインタビューを実施した。当日は、その語りをもとに看護を続ける中で培われたマインドについて解釈を提示し、看護教育学の専門的見地からの講演および参加者との討議を行った。

事後アンケートには14名の回答があり、ベテラン・ナースの姿勢や考え方から多くの示唆を得たとの声が寄せられた。

### c. 来年度の課題と展望

来年度の課題としては、タイミングの良い広報活動、担当者の適切な役割分担（登壇と当日運営の担当の区別、登壇者への事前連絡の徹底など）である。インタビュー実施とその解釈の提示は担当者の負担が大きいことも課題である。

一方、このスタイルでのセミナーは、実践者には可視化の難しい看護を言語化して学術的な考察を加え、実践者のみならず教育者・研究者にも看護の捉えなおしをもたらす機会を提供しうる。業務の見直しを図りつつ、この潜在性を活かし、大学による社会貢献として看護の質向上への寄与ができると考えらる。

### 3) 赤十字リサーチ・フェスタ

#### a. 趣旨

赤十字リサーチ・フェスタは、赤十字系列の医療・福祉施設を中心に連携し、研究や教育の質を高め、より良い実践を行っていくことを目指す。

#### b. 活動内容

令和8年1月21日（水）17時15分～19時15分に赤十字リサーチ・フェスタを開催した。今年度オンライン（ZOOM）と日本赤十字社医療センター内一部対面のハイブリット形式で実施した。プログラムとしては本赤十字社医療センター「冬の院内看護研究発表会」参加および日本赤十字看護大学教員による6演題の研究発表とミニレクチャー、研究支援体制についての説明などであった。

今年度のミニレクチャーのテーマは「看護実践に活かすための文献の探し方と選び方」で、臨床の立場から日赤医療センターから大久保英恵氏、堀越拓海氏、研究的な視点から本学安部陽子教授、検索支援をする図書館司書の立場から唐澤良英氏が登壇し、実際に臨床での疑問から研究のために文献を検索していく過程を想定しながら、進め方が紹介された。

当日の参加者は、日本赤十字社医療センター、本学などから、看護職、教員、大学院生など43名であった。

今回も医療センター内の講堂とオンラインのハイブリッド形式であったため、参加者同士の交流が難しいという点では課題が残ったが、医療センター内・大学内のそれぞれの拠点で対応し、オンライン発表内容についてはチャットにて質問を募集して司会を中心に質疑応答を行うという方法で実施した。一方で、オンライン開催により、勤務後の時間帯、時短勤務や育休中、遠方等の状況にあっても参加が容易となった。

#### c. 来年度の課題と展望

次年度に向けては、広報を強化して参加者を増やすこと、日本赤十字社医療センターと本学との研究支援体制の連携の成果を定例として報告すること、参加者の研究への関心が高まるような内容の充実を図ることが課題である。なお次年度は令和9年2月16日（火）に開催予定である。

### 3. さいたま地域連携委員会

#### 1) 大学コンソーシアムさいたま

##### a. 趣旨

「大学コンソーシアムさいたま」は、さいたま市内の大学相互の自主性を尊重しつつ、大学が有する知的資源を活用した活動を行うとともに、大学相互の連携及び交流と活力ある地域社会の形成及び発展に寄与することを目的として創設されたものである。さいたま看護学部では「大学コンソーシアムさいたま」に令和2年9月に加盟して、リレー講座活動に参加し共通テーマに沿った公開講座を実施している。

##### b. 活動内容

大学コンソーシアムの総会については、学長及びさいたま看護学部長、次長が参加し、情報交換を続けている。

「大学コンソーシアムさいたま」の活動の一環の、さいたま市民を対象とした加盟大学のリレー講座を実施した。看護学部でのテーマは「からだの不思議」として、本学部の白井美穂先生を講師に行った。参加者は、さいたま市内在住の親子 38 組 75 名（事前申込 46 組）、学生ボランティアと教職員 23 名であった。

アンケートからは、「講義も面白く、普段触れる機会のない聴診器や血圧計に触れられたことも良かった」「子供が入学希望を寄せるきっかけになった」「親切に分かりやすく教えてもらえた。学生さんがとても優しく楽しかった」などの声があった。実際にからだの音を聴診器や血圧計を用いて聞いたり測定したりする体験ができ、親子で楽しんでいただくことができた。また写真撮影スポットを設置し、ナース服や赤十字のユニフォームを着て楽しく撮影することができ、本学を保護者世代に知っていただくきっかけになった。



##### c. 来年度の課題と展望

当大学コンソーシアムには、次年度も継続してリレー講座への参加を申し込み、実施していくこととする。なお「からだの不思議」と「バイキン残っていないかな」を交互に実施する。

## 2) UR 都市機構との連携

### a. 趣旨

UR 都市機構は、居住者が安心して暮らせるまちづくりを目指して健康づくりにも力を入れており、本学では令和3年度から UR の団地における健康づくりを連携して取り組んでいる。

### b. 活動内容

令和7年度は、UR と意見交換し、高齢者の低栄養と防災を主として、2部構成で実施した。開催日時は8月19日(火)10時~12時に南浦和団地の住民を対象として実施し、参加者は19名(うちリピーター4名)であった。

第1部として、「いつまでもあなたらしく健康に！日常に取り入れたい栄養対策講座」を実施した。ミニ講話の構成として、初めに本学講師の福田守良による「食生活と脳梗塞」を実施し、次に渋谷済生クリニック管理栄養士の船渡川有夏先生による「高齢者の低栄養について」を実施した。講話終了時に栄養補給のための試供品が配布され、参加者から好評が得られた。

第2部として、本学、学生部会、防災委員会による「避難所の生活でさらなる健康被害を防ぐために」を実施した。学生が、廃用症候群の予防、静脈血栓症の予防について PowerPoint で分かりやすく説明し、また、ふろしきで作るハンドバック、リュックを実演した。レクリエーションとして防災ビンゴを実施した。

アンケート結果は、好評であり、本企画を複数回参加している参加者もいた。次回のテーマについて、複数意見の記載があったため、UR と検討して次年度のテーマを検討することとする。



UR 都市機構 HP :

[https://www.ur-net.go.jp/east/news/20250821\\_minamiurawa\\_topix.html](https://www.ur-net.go.jp/east/news/20250821_minamiurawa_topix.html)

### c. 来年度の課題と展望

次年度も、UR と意見交換し、「暮らしに役立つテーマ」を実施する予定である。本年度のアンケート結果や、対象の地域住民の健康や防災の観点からニーズを調査し、検討する必要がある。また、本学学生に参加を促し、地域で必要な健康や防災に関するニーズについて考える機会と、住民とふれあうことで学生として地域に貢献することの意味を見出せるように支援する。

### 3) 埼玉県内における2つの赤十字病院の看護師への研究指導

#### a. 趣旨

さいたま赤十字病院と深谷赤十字病院からの看護師へ研究指導の要請を受け、令和3年度から教員5～6名が定期的に研究指導を実施している。

#### b. 活動内容

令和7年度さいたま赤十字病院へ研究指導実績は、指導教員体制3名、研究指導本数18本(ベーシック16本、アドバンス2本)、研究指導5回、講義回数2回、院内発表1回であった。深谷赤十字病院への研究指導実績は、指導教員体制3名、研究指導本数13本、研究指導9回、講義回数3回、院内発表1回であった。

#### c. 来年度の課題と展望

次年度も指導の要請があり、研究指導方法を改善しながら継続する予定である。

### 4) 学内での活動の推進

#### a. 趣旨

大学外の地域や組織との連携づくりのために学内の連携体制づくりが重要であると考えて様々な取り組みをしている。

#### b. 活動内容

(1) 地域連携活動の外部への発信として、X(旧twitter)によるDaily Newsの発信をした。「先生マルシェ」について、教員の変更に伴う再調査により担当可能な講演や研修について見直し、大学ホームページに公開をした。

(2) さいたま看護学部内各委員会との連携し、大学としての地域貢献の取り組みを継続している。今年度の学生部会の活動は、学生の主体的な活動への取り組みがみられており、大学祭でのさいたま市保健所との性感染症普及啓発活動や、UR都市機構主催の公開講座では、学生が講師となり、講義とレクリエーションを行った。また、地域の就労支援施設に向いて、施設長からお話を伺い施設の理解を深め、利用者との交流を図っている。

#### c. 来年度の課題と展望

- (1) について、来年度はチラシを作成・配布し、大学外の地域や組織への情報提供を強化する。
- (2) は継続して実施し、さらに活動を推進する。

## 4. 渋谷区との包括連携（S-SAP）

### 1) S-SAP（シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー）協定に基づく取組

#### a. 趣旨

本事業は、本学と渋谷区及び日本赤十字社医療センターが S-SAP 協定を締結（令和 7 年 3 月 26 日）したことにより、本学が地域貢献活動をより包括的に取り組むことを目的として、S-SAP 事業を推進していくものであり、企画課企画振興係を担当窓口とし、地域連携・フロンティアセンターまたは事業部会と協議の上、渋谷区（経営企画課）及び日本赤十字社医療センター（総務課）、S-SAP 参加団体等との連携により、事業実施体制を構築する。

#### 【支援内容】

1. 次世代育成に関する支援
2. 生涯学習に関する支援
3. 福祉に関する支援
4. 健康・医療に関する支援
5. 災害対策に関する支援
6. 地域振興に関する支援
7. 前各号に掲げるもののほか、相互に連携することが必要と認められる支援

#### b. 活動内容

令和 7 年度 シブヤ・ソーシャル・アクション・パートナー協定に基づく取組（実績）

実施日	取組内容	実施場所	本学の協力体制	備考
6/7	原宿外苑中学校「原 リンピック」での健 康教育 (健康・医療に関す る支援)	原宿外苑中 学校	担当：稲田講師・高山助教 原宿外苑中学校の生徒会が中心となり、地域の団 体や企業と連携して企画・運営する、誰もが参加 できる体験型イベント ■今年度のテーマ 「いろいろな人のあたりまえ」 ■区及び日本赤十字看護大学の出展プログラム 妊婦体験・赤ちゃん人形抱っこ体験(人数:123)	渋谷区中央保健 相談所 保健サービス第 一係
7/16	渋谷区の保健師活動 の実際～平時の活動 と災害時の活動～ (災害対策に関する 支援)	日本赤十字 看護大学 (211 講義室) 渋谷区保健 所	担当：内木教授 保健師教育に関する、災害時対応、避難所での健 康管理の講義・意見交換 参加者：参加人数（合計）：35 名 内訳：Web 13 名（渋谷区保健所長他、保健師、事 務の職員） 対面 22 名（渋谷区保健所 11 名、大学院生 8 名、日 看大・教職員 3 名） 第 1 部：2024 年能登半島地震での看護師による避 難所および医療施設での支援 【話題提供：50 分】 避難所支援：内木（教員）[20 分] 病院支援：大学院生 加藤[15 分] 救護所及びクリニック支援：大学院生 菅原[15 分] 【質疑応答：20 分】 第 2 部：渋谷区保健師の保健活動 【話題提供：40 分】 小内保健師 【質疑応答：20 分】	渋谷区保健所地 域保健課 Teams ハイフレ ックス接続

11/15	誰でも学べる地域セミナーと渋谷区保健所の精神保健公開講座の共催による「沈痾 夜のあとに、朝がこない」と題し、心の健康についてのセミナーを開催 (健康・医療に関する支援)	日本赤十字看護大学(211講義室)	担当：鷹野教授 講師：精神科医 仮屋暢聡先生（本学科目内講師） 参加者：49名（うち渋谷区37名）	渋谷区保健所地域保健課
2月 3月	渋谷区放課後クラブおよび渋谷区社会教育館祭の手話啓発イベントに、本学CLAP(手話サークル)実施	渋谷区放課後クラブ	担当：CLAP(手話サークル) 渋谷区放課後クラブ 2/2、2/9、2/18、3/3 恵比寿社会教育館祭 3/7、3/8 CLAP手話サークルは区内小学校放課後クラブおよび社会教育館祭で手話啓発イベントを実施	福祉部障がい者福祉課
2/13	一般社団法人シブヤフォントの障害がある方がデザインしたラッピングの自動販売機を校内に設置することで、活動を披露すると共に販売額の一部を、(株)伊藤園を通して還元	日本赤十字看護大学広尾キャンパス内	担当：総務課 鳥羽	S-SAP企業 伊藤園 <a href="https://www.itoen.co.jp/news/article/71280/">https://www.itoen.co.jp/news/article/71280/</a>

### c. 来年度の課題と展望

今年度は、渋谷区障がい者福祉課主催の「渋谷区放課後クラブ」では、学生ボランティアが2～3月に手話サークル CLAP が参加しており、次年度も学生ボランティアの活動が期待される。

---

2025（令和7）年度 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター実績報告

作成年月 2026（令和8）年 5月

発行 日本赤十字看護大学 地域連携・フロンティアセンター

編集 フロンティアセンター 広報

〒150-0012 東京都渋谷区広尾4-1-3

日本赤十字看護大学 企画課企画振興係

電話：03-3409-0924

FAX：03-3409-0589

---